

マジシャンのための
ウケるキッズ・ショーの
作り方

著：デビッド・ケイ
訳：滝沢敦・新城真知子

写真：フレデ・リーバーマン
イラスト：ロバート・レイトン

Seriously Silly

How to Entertain Children with Magic and Comedy

by David Kaye



Kaufman and Company

 scriptmaneuver

この書籍で解説されているマジック道具（ウオンドやその他の道具）はウェブサイト（英語）www.sillymagic.com で購入できます。日本のマジックショップで購入できるものもあります。

謝辞

この本の執筆はもちろん、私がマジシャンとして成長するのを助けてくれた次の人たちに感謝します。リチャード・カウフマン、スタン・アレン、ジョン・モーリング、マーク・ダニエル、サミュエル・パトリック・スミス、デビッド・ジン、サイモン・ラヴェル、トレバー・ルイス、テリー・ハーバート。

骨の折れる校正などの作業を助けてくれたダスティン・スティネット、ジュリー・M. サイモンソン。

また解説の写真でチャーミングな観客役を演じてくれたデビッド・ジョドキンに。

キッズ・マジックの歴史を調べる過程でお世話になった次の人たちへ。ジョン・パルフレイマン、チャールズ・レイノルズ、ジェイ・マーシャル、ピリー・マッコム、デュアン・ラフリン、マーク・ウォーカー、リンダ・クランプ。

1999年のキッドブラで「よくある10の問題」についてのブレインストーミングをしてくれた、全国から集まった30人のプロフェッショナル・パフォーマーたちへ。本書のパート4の内容は、このときのセッションが基になっています。あらためて感謝を。

マジック以外の部分で私をサポートしてくれたジェス、シェリル、ルース、シンダ、リリーとカミラ、スコット、ブルースに。

私のユーモア・センスを形作ってくれた父とウディ・アレンに。そして最後に、6歳のころ私が初めて見たマジック・ショーで私をアシスタント役としてステージにあげてくれた名前も分からないマジシャンに。あなたが私の人生を変えたのです。

本当に感謝します。

『ハクナ・マタタ』 作曲：エルトン・ジョン 作詞：ティム・ライス
著作権：ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社

© 2005, 2013 by David Kaye 本書の内容を、出版社、原作者の書面による許諾なくして、いかなる方法による複製、公衆送信、改変、切除、ウェブサイトへの転載等する行為は著作権法により禁止されています。

私のショーを見て笑ってくれ、
声をあげて楽しんでくれ、
好きになってくれた、
ニューヨークを含む何千何百という世界中の子どもたちへ。



子どもとはどういうものを私に教えてくれたのは、
君たちでした。本当にありがとう。
私のマジックを観ている君たちを見るのは本当に楽しい体験でした。
君たちも同じくらい楽しんでくれたことを願って。

目次

まえがき	11
はじめに：魚を釣る方法教えます	14

パート 1

基本中の基本から	17
私はキッズ・マジシャンであることに誇りを持っている	18
クライアントNo. 1347：ブルネイ国王	22
キッズ・ショーの起源	25
キッズ・ショーの起源と影響：イギリスの場合	25
パンチ&ジュディ	27
キッズ・ショーの起源と影響：アメリカの場合	28
クライアントNo.529：スーザン・サランドン	32

パート 2

キッズ・ショーにおける心理学	35
“本物のおまじない”を学ぶ	36
子どもにとってマジックとは何か？	38
はじめの第一歩：キッズ・マジックを理解するための10のステップ	42
ステップ1. 子どもを好きになること	42
ステップ2. 大人に話しかけるように、子どもに話しかけること	43
ステップ3. 現象よりもエンターテインメント性に重点を置くこと	44
ステップ4. 気が散る要因をなくすこと	44
ステップ5. 「それ知ってる！」を真に受けないこと	45
ステップ6. 流れに身を任せること。台本から離れよ	46
ステップ7. 子どもは参加したがるものと知ること	48
ステップ8. プロットは必ず説明すること。しかもシンプルに	48
ステップ9. 子どもたちに流行っているものを利用すること	49
ステップ10.楽しむこと	49
年齢別のショー	51
3～6歳児：とにかくおかしくヘンなことを	52
7～9歳児：誰かおならした！	53
10～13歳児：カードは最初から天井についてたんだ！	55
一つのマジックの三通りの演技	57
3～6歳児向けのシルクの消失	57
7～9歳児向けのシルクの消失	60
10～13歳児向けのシルクの消失	62



デビッド・ケイ

アシスタント役の子どもを最大限に活かす	65
1. アシスタント役をつくる	66
2. 正しいアシスタント役を選ぶ	66
3. 歓迎されていると感じてもらう	68
4. アシスタント役を着飾らせる	68
5. 子どもに力を与える	69
6. アシスタント役にご褒美をあげる	69
クライアントNo.4421：デビッド・レターマン	70

パート 3

受けるマジックの作り方 73

大切なのはゴールではなくてプロセス	74
また魚釣りに行きましょう	74
コメディクラブに学ぶ	74
大切なのはゴールではなくプロセス	75
導入	76
長い中間が必要な理由	77

笑いの要素の組み込み方	81
チグハグさ	81
困っているマジシャン	83
おかしい言葉	86
面白い小道具	87
大げささ	90
繰り返し	91
【ブレッド・トリック】	92
訳注：日本語で演じる場合	97

後ろ、後ろ！	98
笑い	99
おまじないを唱える	99
おまじないを唱えながら体を動かす	99
特定のマジックだけに使う動作を作る	99
指を差させる／「見て！」	100
言葉の間違いを正させる	101
【クリスタル・シルク・チューブ】	103

僕がやったんだ！	109
知識で子どもをエンパワーする	109

技術で子どもをエンパワーする	112
【プレジデンシャル・ミスメイド・フラッグ】	114

むかしむかし、あるところに	121
前段	121
プロットをつくる	122
ボーイ・ミーツ・ガール	122
強烈な結末の必要性	123
完璧な解決による結末	123
ワワワワ・エンディング	125
結末のないマジック	126
【パニシング・コーク・パパ】	129

まあ、どうやったの？	134
なぜ大人も楽しませた方が良いのか	134
大人の楽しませ方	136
【ミルクピッチャー・プラス】	138

ここから先は、絶対、読まないこと！	144
本物のアドリブ	144
リハーサル済みのアドリブ	144
台本に載っているアドリブ	146
手順にアドリブを加える	147
子どものセリフをそのまま反復する	147
とにかく、絶対に、やっちゃダメ（行動）	149
とにかく、絶対に、言わないで（セリフ）	155
一つの行動から三つの笑いを引き出す	157
【世界で一番面白いカラーリング・ブック】	159
カラーリング・ブックに自分のキャラクターの絵を差し込む方法：	164

教えて、やらせる	167
自分の手順に原理を組み込む	169
クリスタル・シルク・チューブ	170
アンビシャス・カード	172
既存の手順に組み込めるテクニック一覧表	174
クライアントNo.3719：ブルース・スプリングスティーン	176

パート4

よくある問題の解決方法 181

シリー・ビリーの“妨害発展の法則”	184
「それ知ってる！」を真に受けない	186
どうして子どもは「それ知ってる！」と言うのか	186
その一方で	187
問題を解決するための5つのステップ	189
ステップ1：予防する	189
ステップ2：ユーモアを使う	192
ステップ3：丁寧をお願いする	193
ステップ4：きつくお願いする	193
ステップ5：ショーを中断して助けを求める	194
5つのステップの覚え方	195
キッズ・ショーでよく起きる10の問題の解決方法	197
問題1. 大人のおしゃべりがうるさい	197
問題2. 幼児が動き回って邪魔になる	200
問題3. 子どもが「それ知ってる！」と大声で言う	203
問題4. 問題児が走り回ったり道具を奪いに来る	206
問題5. 年長の子どもが問題を起こす	208
問題6. 子どもがじっと席に座っていてくれない	210
問題7. 主役が恥ずかしがり屋で参加してくれない	214
問題8. 観客の年齢層がバラバラ	216
問題9. 顧客が屋外でショーを行いたがる	216
問題10. 燃え尽き症候群	220
クライアントNo.5108：マドンナ	223

パート5

ショー全体を調整する 227

ショーを作る	228
ウォーミング・アップ	228
オープニング	229
ショー本体	230
クライマックス	230
さらにもう一歩進めて	231
どこまでやって良いのか？	233
ハトを追いかけるとのこと：子どもにとって力は大切	237
ヒューストン、問題が発生した！	240
最後に	243

付録

別表1 子どもの年齢別認知発達表	244
別表2 子どもにも分かるマジック用語の言い換え一覧	245
別表3 子ども用にアレンジしやすいメジャーなマジック一覧	246

まえがき

ここ四半世紀で、子どもたちの態度は徐々に変わってきました。今の子どもたちは程度の差はあれ、昔にくらべて断然目が肥えているのです。いわゆる科学の発達（不可能なことを簡単にやっつける映画のヒーローたちや血を大量に流すゲームなど）のおかげで子どもたちは強烈な刺激に慣れており、それらと比べるとマジシャンの演じるマジックは退屈なものになってしまったのです。

さらに残念な変化もあります。20年ほど前までは一部の例外を除いて子どもは一般的にマナーが良く、静かで思いやりを持っていました。マジシャンにとっても、そんな子どもたちを相手にすることは特別難しいことではありませんでした。しかし今では、当時は例外だったような子どもたちが幅をきかせるようになってしまっています。今の子どもたちが一五年前の子どもたちより劣っている、というわけではないでしょう。しかし昔を知っている大人たちは、今の子どもたちは昔よりマナーがなくなっていると断言しています。彼らは年上に敬意を払わず、公共の場での振る舞いもとても褒められるものではありません。

今みなさんが読んだ文章は、1939年にエディー・クレバーが書いた『子どもたちをマジックで楽しませる (Entertaining Children with Magic)』からの引用です。おそらく子ども向けにマジックを演じることについて書かれた最初の本でしょう（「血を大量に流す話のラジオ」という原文は「血を大量に流すゲーム」に替えましたけどね）。どうでしたか？みなさんは、私が今の子どもたちについて書いたのだと思いますか？

クレバー氏の文章からは多くのことが学べます。子ども自体についてはもちろん、大人から見た子どもの目線やさらには子どもにマジックを演じることについてまで書かれています。1939年当時にクレバー氏が心配していたのは、子どもたちが様々なメディアに過剰にさらされることで、ライブのマジック・ショーに対する興味が失われてしまうのではないかと、ということでした。クレバー氏は映画やラジオを引き合いに出しましたが、これは現在でも同じことが言えそうです。子どもたちは様々な新しいメディアによって変わってきました。20世紀初頭に流行した庶民向け映画館に代わってゲームやテレビ番組が数多く出



現し、子どもたちは次から次へと発売されるDVDを何度も繰り返し見るようになりました。

こういったメディアは子どもたちの“刺激の期待値”を変えてきました。今の子どもたちはより早いペースで、より大きな動きをするものを望むようになっています。CMやミュージックPVが子どもの集中力に悪影響を及ぼしていると非難されるのは、今では当たり前の光景です。さらに言うておかねばならないのは、現在は様々なTV番組や映画、本やゲームといったものが製作されていますが、その中でも「子どもたちを対象にしたもの」が制作されることがごく普通になっているということです。視聴者の年齢層まで明確に計算された子ども向けのメディアが数多くあるのです。

そしてクレバー氏は、こういった新しいメディアのせいで子どもたちの態度、振る舞い、言動が以前より「悪くなった」と訴えています。でもこれはどこでも聞く話だと思いませんか？みんな「今の子どもは昔の子どもより言うことをきかなくなった」と不満を言うのではないですか。あのアリストテレスだって自分の子どもには、昔の子どもよりも態度が悪いと不満を言ったに違いないのです。

つまり、子どもは変わらないのです。子どもはいつの時代も常に、大人が思うよりもずっと態度が悪いものなのです。さきの例から分かることはまだあります。それは「子どもは変わらないが、時代は変わる」ということ。テレビを通じて世界中の子どもたちが最新の流行やティーン・アイドルのファッションをマネしています。田舎に住んでいる子どもたちだって、都会で流れている最新の曲を聞くことができる。ハリウッドの有名女優が素敵な服を着ていたなら、それが翌月にはアメリカ中のウォルマートで販売されたりするのです。子どもの態度やユーモア、使う言葉などは地域特有のものではなく、今や世界規模で動いています。

現在われわれは、より寛容でより進歩した、より教育のある社会に生きています。インターネットと200以上ものチャンネルがあるケーブルテレビのおかげで、ほんの数年前と比べても、今の子どもたちはより早く賢く育っていきます。では子ども向けのマジックはその変化に対応してきたか？と問われれば、そうではないと言わざるを得ません。

今こそ「現代の都会に住んでいる物知りな子どもたち」を相手にしたマジックについて考えた本が必要な時ではないでしょうか。現在のキッズ・ショーは、使われている価値観やセンス、間の取り方が未だに古くさいものが多いように思います。私たちが相手にしているのは21世紀に生まれた子どもたちであって、19世紀の子どもではありません。時代が変わるのなら、私たちも変わっていく必要があるのです。

この本では、実際に私が子どもたちを相手に演じてきたアイデアばかりを収録しています。みなさんの参考になれば良いと思うのですが、もちろんすべてに納得していただけたとは思っていません。私は18年以上もの間に7,000回以上、子どもたちにマジックを演じ、これで生計を立ててきました。私なりにマジックを演じ続けることで、パフォーマーとしても経済的にも多くの成功を収めることができました。あなた

がこの本を楽しんでくれれば、そしてあわよくば、この本が何かの役に立てれば良いと思います。

私の考えを理解してもらえ、自分のものにしてもらえるならこんなに嬉しいことはありません。世界中のすべての子どもたちのために、この本を通じて子ども向けマジックの底上げがされることを願っています。



はじめに：魚を釣る方法教えます

『飢えている人に魚をあげれば、彼はその日は生き延びられるだろう。
しかし魚の釣り方を教えれば、一生飢えることはない』
この教えはマジックにも当てはまる。

マジックの本とは大抵、あるマジシャンが長年磨き上げてきて、そのうえで仲間のマジシャンたちと共有したいと思ったマジックが解説されているものです。現在はマジックを解説してくれるレクチャーDVDが数多くあり、それでマジックを覚えることによってオリジナリティの無い、コピーされた演技ばかりするマジシャンが多く出るようになりました。しかし一流のマジシャンたちに読むべき本を尋ねると、最も多く出てくるのはタネや仕掛けについて書かれたものではなく、ダリエル・フィッツキーの三部作『ショーマンシップ・フォー・マジシャン (Showmanship for Magicians)』(1943年刊)、『トリック・ブレイン(The Trick Brain)』(1944年刊)、『マジック・バイ・ミスディレクション (Magic by Misdirection)』(1945年刊)といった本なのです。

これはなぜでしょうか？一流のマジシャンたちは、マジックを学ぶならばその芸術の理論を理解する必要があることを知っているのです。どのように、なぜ、マジックがエンターテインメントとして成立するのか、本質的な知識を持っておかなければならないのが分かっているのです。そうすることで初めて、私たちは自分たちのマジックを賢明な視点でみなおす事ができるのです。誰かのマジックをコピーするのではなく、手を加え、見栄えをよくし、直しを入れて、自分自身のものに作り変えられるようになるのです。

我々の努力が実ったのか、21世紀に入ったあたりからキッズ・ショーは以前より市民権を得、それまで無かったほどの人気を獲得するようになりました。私もキッズ・マジシャンとして多くの雑誌の表紙を飾ることができたのです(私のキャラクターである「シリィ・ピリー」として、『マジック誌(MAGIC)』1995年9月号、『ジニー誌 (Genii)』2004年9月号)の表紙になることができました。ほ



とんどのマジック専門誌でキッズ・ショーのコラムが毎月連載されるようになり、マジックのコンベンションではキッズ・ショーを専門としたレクチャーも開かれたりしています。またキッズ・ショーに特化したコンベンション「キッドブラ」も開催されるようになりました。

とは言え、まだまだ未発達な部分もあります。キッズ・ショーについて書いた本も出てくるようになったのですが、残念ながらそこには大人を相手に演じるマジックを解説した本と同じような形で、子ども向けのマジックが解説されているだけなのです。きっとそのマジックは、著者が何百回と演じて磨き上げてきた、お気に入りのマジックなのでしょう。その内容はたいてい素晴らしいもので、文句のつけようはありません。しかしながら、キッズ・ショーの世界には決定版と言える一冊は未だないのです。マジックを通じて子どもたちに楽しんでもらうための哲学や心理学、理論を教えてくれる本が、まだ存在していないのです。

私はこの本が、その一冊になればと思っています。

本書では、マジックを通して子どもたちに楽しんでもらえる方法の原理原則を紹介します。私は18年以上キッズ・ショーを演じてきました。そこで発見した「素晴らしいキッズ・ショーを作るための基本」をお伝えしたいと思います。

私は、私が演じているマジックのやり方をただ解説するよりも、キッズ・ショーを演じて人生を豊かにするための考え方を書きたいと思っています。特定のマジックやセリフについて書くよりも、理屈と原理原則をこそ紹介したい。子どもたちに楽しんでもらうとはどういうことなのか、その知識をしっかりと持てれば、新しいマジックに出会ったときにも役に立ちます。そしてこれは大人を対象にしたマジックにも言えることです。これらの原理原則を身につければ、あなたも自分の演技スタイルに合った独自のパワフルな演技を作ることができるのです。様々なマジックを本やDVDで学んだときに、自分用にアレンジしより面白く作り上げることができるようになるのです。

とは言うものの、私がいくらマジックやショーをより良くする知識やノウハウを提供しても、あなた自身がそう望まなければ始まりません。あなたは演技をより良くしたいと思わなければならないのです。より面白く、より良いパフォーマーになりたいと望まなければいけません。子どもたちの失笑を無くさないといけません。彼らを驚かせないとはいけません。決められたマジックをそのまま演じるだけで満足している読者にはこの本は向きません。チェンジング・バッグが空なのを見せた後で大量の風船を出すとか、風船を40分間ねじるだけで「マジック・ショー」と呼んでいる、そういうことがしたいのであれば、私にできることは何も無いでしょう。素晴らしいマジシャンであるジョン・カーニーが書いた『カーニーコピア (Carneycopia)』に収録されているエッセイの冒頭にこうあります。

「演技に生活がかかっていないアマチュアでさえも、大きな賞賛をもらえば充実感や

満足を感じるものだ。名人の域までとは言わなくとも、上達したいとさえ思わないのであれば、その人にとってマジックとは何なのだろうか？」

この文章を読んでいるみなさんは、そういった人たちではないでしょう。ショーをより磨き上げることに力を注ぎ、子どもたちが楽しんでくれるようにベストを尽くす人たちだと思います。そんなあなたに、そしてキッズ・ショーを愛するすべての皆さんに、感謝します。

よいフィッシングを！



サンプル

「それ知ってる！」を真に受けない

キッズ・ショーを行うと、「それ知ってる！」や「見たことある」と言う子どもが必ずいます。こんなことを言われるのはしょっちゅうです。言われてもうるたえないでください。慌ててはいけません。実際には、あなたが思うほど悪い状況ではないのですし、彼らも悪意で言っているわけではない場合がほとんどなのです。

子どもは「それ知ってる！」とよく言いますが、実際には知ってなどいません。その証拠にマジシャンがロープを手にすると、何百とあるロープ・マジックのうちどれを演じようとしているか分からないにも関わらず、子どもは「それ知ってる！」と大声で言うではありませんか。それでも「それ知ってる！」と言うのです。マジシャンがトランプ1組を出しただけでも「それ知ってる！」と言います。カードマジックは何千種類もあるのにです。マジシャンがどのカードマジックを行おうとしているか、実際に子どもが知っているわけがありません。

どうして子どもは「それ知ってる！」と言うのか

子どもが「それ知ってる！」と言ったとき、これは実際には別のことを意味しています。問題児が悪意を持って発言しているわけではないのです。

3～6歳児が「それ知ってる！」と言う場合は、その道具を見たことがある、という意味です。道具を知っている、と言ったに過ぎません。

幼い子どもにとって何かをよく知っている、ということは大きな意味があります。なぜなら彼らの短い人生では、知らないことや初めて経験することの方が多いためです。周囲にあるのは初めての物、初めての言葉、初めての人ばかり。なので自分が知っている物を見ると子どもは興奮するのです。「知っている」という感覚は子どもにとって、いつもと違った予想外のものなのです。彼らにとってマジック・ショーは新しい経験です。マジック・ショーで見えるもの経験するものすべてが、どうせ自分にとっては初めてのものだろう、と子どもたちは思っています。そんな場所で自分が知っているものを見つけると、それがただのロープであっても知っているということに驚き、感情を表現せずにはいられなくなります。その結果が「それ知ってる！」なのです。

25000人の大人がエルトン・ジョンのコンサートに行ったとします。そこでエルトン・ジョンが「僕の歌は君の歌」のイントロを演奏し始めると、どうなると思いますか。観客は拍手を始めるのです。この拍手は「その歌は知ってるから演奏しなくていい」という意味ではありません。「この歌は知っている。大好きだから何度も聴いた。また聴きたい」という意味です。同じように、幼い子どもは自分が知っている

ものを見て興奮した気持ちを表現するのです。「これは見たことがある。前に見たとき、面白かった。また見ることができて、すごく嬉しい！」

7～9歳児や10～13歳児が「それ知ってる！」という場合には、また別の理由があります。彼らは学校では、自分たちが主役の自分たちの世界を持っています。しかし自分にできないことをやってみせるマジシャンの前では、まだまだ自分たちが若く未熟だと言うことを思い出さざるを得ません。「それ知ってる！」というセリフは、現実と自我の差を埋めるために発せられるのです。

彼らの自我はまだ不安定です。知っていると言うことで、友達にすごいと思われたいのです。マジックのネタを知らなくても、格好良く思われたいためにそう言ったりするのです。しかし悪意があるわけではありません。ショーを台無しにするつもりはないのです。不安定なだけなのです。

マジシャンがロープを出したのを見た瞬間に彼らの脳裏をよぎるのはこんな思考です。「親友にパカだと思われたくない。多分、あいつはこのマジックを知ってる。だから、自分も知ってると言ってやろう。もし言わなかったら、こんなことも知らないんだと思われてしまう。でも、あいつは知っている。だから自分も、知っていると言わない」とそして、こう言うのです。「それ知ってる！」

その一方で…

実際に子どもがクライマックスや仕掛けまで知っている場合もあります。何度もマジック・ショーを見るような子どもは、そこで起こったことを覚えていきます。どのパーティでもマジシャンが呼ばれるような富裕層の地域では、特にそうです。ニューヨークでは次のような光景はよくあるものです。ダブパンをテーブルに載せると、子どもたちが「鳥が出てくるんだ」とか「お菓子が出てくるよ」と叫ぶ。ニューヨークの子どもたちはダブパンを使ったマジックを何度も見ているので、道具を見るだけでクライマックスが分かってしまうのです。

驚きのクライマックスをバラしてしまう子どもと、プロットを言うだけの子どもがいますが、これは大きく違います。ヒピティ・ホップ・ラビットを見せたときに子どもが「赤と黄色になるんだ」と言うのと、ミルクピッチャーを出したときに子どもが「ミルクが消えるだよ」と言うのでは意味が違います。ミルクピッチャーを使って何がどうなるかバシでも、それほど問題ではありません。しかしヒピティ・ホップ・ラビットのようなマジックの内容がバシでも、まったく面白くなくなってしまいます。私だって、赤と白と青いシルクを出したときに子どもから「旗に変わるんだ！」と言われてしまうときもあります。しかし、赤と黄色と緑のシルクを(クリスタル・チューブを演じるために)出すのを見て「旗に変わるんだ！」と言われるのは、むしろとても面白いことです。

こういったことを避けたいと思ったら、(中略)

ショーでは基本的に子どもに声を出してもらいたいので、問題はややこしくなります。当然彼らにはショーの内容に反応してほしいし、引っかかった瞬間には大声をあげてほしいし、アシスタント役の子どもには元気に振舞ってほしい。その一方で手順を始めたときに大声でネタをばらしてはほしくない、と我々マジシャンは思いますが、そんなことは子どもたちにとっては関係ないでしょう。子どもが「それ知ってる！」と言うのは、それほど悪いものではない、ということだけ覚えていてください。悪意はないのです。それはとても子どもらしい行動なのです。こちらはやるべきことをしっかりやるだけです。

『キッズ・ショーでよく起きる10の問題の解決方法』の項目では「それ知ってる！」と言われたときの面白い対応を数多く紹介しています。